

越境する自己変容：教育におけるアポリアの経験再考

有源探, ジェラード
玉川大学文学部 (教育哲学)

<https://doi.org/10.15017/1904685>

出版情報：教育基礎学研究. 6, pp.1-14, 2009-03-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

越境する自己変容

— 教育におけるアポリアの経験再考 —

有源探 ジェラード

はじめに

本稿では、自己変容を旅に例えて、目的への「到達」の要素を重視する人間形成という教育的営みと、その営為を阻む「途中」の困惑である「アポリア」の状態について考察する。ある目的への「到達」を意図する旅の経験と旅の「途中」でのアポリアの経験とは異なる性格をもつ。その相異を捉え、別様な自己変容の契機および世界との関係としてのアポリアの経験を示していきたい。

人間の一生が比喩的に旅に例えられることがある。そのような旅は単に出発点から終着点への移行であるだけでなく、その途中での旅人自身の変容の過程でもある。無論、自己変容と関連する以上、旅は人間形成とも密接に関わるだろう。但し、人間形成の旅とはその途中で経験した困難を克服して、迷いはをらし、目的地へと到達することを意味する。世界や社会との円滑な関係のためには、疑問には解答があらねばならず、また問題には解決があらねばならない。教育的な旅は了解と解決に至ることではしか、その完結を迎えない。そして、目指されるその到達点とは、自律した、成熟した人間（像）のことであろう。なるほど、旅人は誰もが途中で迷うことなく、無事に到着することを望んでいる。迷いというのはけっして快い状態ではなく、避けるべきものである。そのために、様々な方法が駆使されるが、しかし、迷いの可能性は常に避けられるものであるとは到底いえないだろう。このように、迷いが依然として存在することは、有用性・効率性という「到達の優位」を掲げる傾向の延長線上にある問題として考えられ、その迷いへの対応が新たに求められるように思われる。本稿では、迷いや困惑の代表例であるアポリアについての考察を通じて、アポリアは旅の文脈において特別な位置を占めていることを提示し、アポリアにおける自己変容の可能性について述べていきたい。

I アポリアと「路」との関係

(1) 世界認識を阻むアポリア

倫理学において、道徳的なディレンマが引き起こす判断不可能性はアポリアとして捉えられることがある¹。また、プラトンの哲学では対話によって突き落とされる困惑の状態がアポリアと呼ばれている。これはどこにも進むことのできない行詰まりを意味しており、それ以上疑問に対する解答を提出できなくなる知的麻痺のことである²。他に、

プラトンによるアポリアをふたつの確信の間に位置する「過渡的段階」(transitional phase)であるとみなす論者がいる。一方は誤った考えがあるという確信であり、他方は正しい認識があるという確信である。また、アポリアはそれ自体としてはけっして教育的な契機ではありえない。むしろそれはどこにも至らない無益な瞬間である³。それは誤解があげられる瞬間であり、正しい認識を改めて追求することを可能にする世界認識への過渡的段階である。

視点を変えれば、アポリアに陥ることは、理論的な次元であれ、実践の次元であれ、未知なるものに直面し、それを説明・理解できない、学習者を迷わせる状況であるともいえよう。疑問が生じるのだが、「途中」で行く手を阻まれて、解答への路が断たれている。アポリアとはそのような「路がない」状況であり、世界を認識しようとする人間の営みを阻むものとして捉えられている。従って、不毛な行詰まりから生じる困惑をはらすために、疑問に対する答えを得ようとするならば、その答えへと至る路を改めて追求しなければならないだろう。

それはまさに、教育的営為のみならず、知的探究の目的である。それぞれの営みはその迷いを乗り越えて、問題の解決に到達するような路、もしくはそこまで導くような方法を見出さんとする。そうして、世界の諸事象を了解し、一貫した体系へと回収しようとするのである。

さらに、教育の営みが目指すのは世界認識、社会規範、諸技術などに体现される、そのような一貫した体系を後世に伝えることである。その体系は、各目的に通ずる各々の路の総体から成り、いわば了解された世界の通行網、もしくは地図である。その地図に張り巡らされた「路」は、ある特定の出発点とある特定の到達点、換言すれば、問題と解決、疑問と答えを結ぶものである。そこには、それぞれの路が明確な形で、ある目的とそれに到達するための手段(方法)をつなぐ役割を果たす。体系はそれらの路なくしては存立できず、路は明確な目的なくしては不全状態に陥る。

さて、迷いや困惑が乗り越えられたところで、目的である正しい認識に到達するのだが、以降の議論においても重要な要素となる「乗り越え」について一言加えておきたい。越えることは「境界」の存在を前提としている。乗り越えるべき境界があってこそその越境可能性であることはいうまでもない。

この場合、境界とはある特定領域を括る線で、その内部への属性を規定するものであると同時に、その外部を「外部」として規定するものである。未知なるものが理解できないということは、まさにその境界の外側に位置するからである。その境界線を次々と越えることによって、やがてその困難は克服され、未知なるものが了解へと回収されるだろう。世界認識の拡張運動を未知との境界を乗り越えること、越境することとして捉えることができる。

例えば知識や規範の習得とは、そのような越境によって、既知と未知、義務と禁忌を

区切る営みである。そして、世界認識の「拡張運動」というのは人間形成の過程であり、教育によって目指される「成長」や「発達」の過程にはかならない。

ところで、人間形成を旅に例えることは以下のようなことを意味する。未熟者であれ、熟練者であれ、旅に臨む者は、誰もが迷うことなく目指す目的地へと辿り着くことを願っている。旅の技法に長けた者は、その途中での弊害を回避できるのだが、旅の経験が浅い者は行詰まりや迷いに陥ることがしばしばある。しかし、目指す目的地へと迷わずに到達するための方法を会得すれば、つまり、「この路を進めば、あそこに到達する」などという関連や規則を覚え、それでもって旅の経験を積めば、迷いの可能性を軽減できるようになる。そのような逐次的な世界了解の獲得は旅を通じての自己変容の一側面である。

先に述べたように、迷いは旅の進行を妨げ、ときには旅人の命まで脅かす不吉な出来事である。よって、その意味では、どこにも通じない、「路がない」状態のアポリアもまた、路に迷わないための技法の習得としての教育にとって、厄介な存在であるということは容易に理解できよう。この観点からすれば、確かに、アポリアは不毛な行詰まりである。だが、目的地に着くことなく路に迷うという状況を経験した人にとって、アポリアはまさに特異な出来事である（実際に森や山で迷った者は、生還しても、その遭難の記憶が残るように）。つまり、特異なる「アポリアの経験」が拭い難く残るように思われるが、その点について後述する。

(2) ふたつの「路」

旅の比喩を通じて、自己変容の過程を捉えようとする本稿において、旅の始点と終点（目的・完結）を結ぶもの、いわば旅の過程である「路」についての考察は格別重要なことである。ところが、先に述べた「路がない」状態としてのアポリアは、路の否定もしくは不在であるがゆえに、終局、路の文脈から追放されることになる。しかし、本稿の冒頭で提起したように、自己変容を旅に例えて、その文脈においてアポリアについて考えようとするならば、肝心のアポリアを省くことはできないだろう。以下では、アポリアと「路」との関係性を再考していきたい。

「アポリア」という言葉自体はギリシャ語の *aporia* に由来し、古代ギリシャの哲学、なかでもプラトンの著作において認められる。その意味は *aporos* の状態にあること、すなわち「通行不可能・路がない⁴」状態である。無論、「路」を指す言葉もまた、ギリシャ語のうちに見出すことができる。だが、コフマン (Sarah Kofman) によると、ギリシャ語には、「路」を意味するものとして、文脈の異なる、「混同してはならない」ふたつの語があるという⁵。それは *hodos* と *poros* である。

Hodos とはある目的地に通ずるような既存の路のことであり、どこか「へ」の路である。また、より抽象的な文脈で、「方法・体系」を意味する⁶。正しい *hodos* を進めば、

問題は解決に、疑問は解答に至るだろう。Hodos は既成の世界了解の次元に属し、目的への到達の要件によって規定され、正否のあるものである。なるほど、旅人にとって、hodos という路を進めば、迷うことなく目指す目的に到達するのに最もふさわしい手段となるだろう。また、日々の生活で直面する諸問題を解決に導く方法を学んでいくことは世界了解の拡大には欠かせないことである。ここで注目すべきは、hodos の意味と前節で述べた「路」の捉え方とは近似概念であるところか、同一のものであるということである。すなわち、教育的な路、知的探究の路とは hodos のことであるといっても過言ではないだろう。

但し、あらゆる路は必ずしも、特定の目的まで導くような路であるとは限らない。というのは、予めその先に何があるかわからない、既成の世界了解には属せず、「途中」で新たに見出され、拓かれなければならない路もあるだろう。

そのような路は poros の意味文脈での路である。Poros とは特定のふたつの地点を結ぶ既存の路ではなく、むしろ、海路のような、水上に拓かれる路である⁷。コフマンによれば、poros とはより抽象的な意味で、困難な状況を逃れるために見出される窮余の策 (expédient) として訳されてきたが、同時に、その捉え方の問題性を指摘する必要があるという。なぜなら、poros をそのように捉えることで、その「意味論的な豊かな文脈」を見逃すことになりかねないからである⁸。poros という路は海路の如く、予め開かれた路としては存在しない。むしろ、その度ごとに、新たに拓かなければならないのである。よって、コフマン曰く poros とは「路が存在しない、そして存在しえないところに見出される路」のことである⁹。

「路」の両義性を示したところで、アポリアと「路」の関連性についての考察に戻ることにしよう。そのために、以下では、アポリアについて深く論究してきたデリダ (Jacques Derrida) の思想に着想を得て、論を展開していきたい。人間にとって、世界認識および世界との関わりのおよび大半が経験を通じてなされる。だが、デリダによれば、アポリアの経験とは世界との特異な関係である。また、アポリアと「路」との関連性、「旅」との関連性という観点からみれば、デリダの議論は有意義な指摘に富んでおり、アポリアおよびアポリアに陥るといふ経験について考察するために、示唆を得ようと考える。

II アポリアという「非・路」

(1) 共約可能性の限界の経験

デリダによると、経験とは「貫通 (traversée)」または「貫通すること (passer au travers)」である¹⁰。それはある目的地に向かっての路を通して、旅をすることである。ところが、この意味では、完結したアポリアの経験はありえない。なぜならアポリアとは「非・路 (non-chemin)」だからである¹¹。非・路とは路の不在、単に路が「ない」状

態ではなく、むしろ確固たる既存の路に「非ず」ということであり、その範疇から逸脱しているということである。従って、目的地があり、完結しうる「路」とは異なる「非・路」はそれでもなお、それとは別様の路、いわば路ならぬ路であると考えられる¹²。

経験の過程はここで、様々な比喻をもって描かれている。それはまず貫き通ることであり、または旅であり、目的地へと続く路の通行可能性のことである。それに対して、完結のない、目的地のない、貫通を許さないものとしてアポリアの経験がおかれている。

ここでは、貫通が可能かどうかは議論の要だといえるが、それを問題にすることは、既述したような「越境の運動」を問題にすることと密接につながるだろう。

デリダによると、「境界」とは、未知なるものの出現によって生じる疑問、問題、困惑などを次々と乗り越えることで、了解への回収や世界認識の拡張運動だけではない。越境の運動にはもうひとつの側面がある。それは未知なるものによる「既知の世界」の侵犯という形の越境である。

こうした観点から、デリダは「境界」を区画としてよりも、「限界」(limiteもしくは *frontière*) と捉える。そこは摩擦の場、属性が曖昧になる淵である。その境界は人間が未知の境界を乗り越えることによって解消されるようなものではない。それはむしろ、未知なるものの出現とともに現れる「既知の世界の限界」である。

越境をも含意する限界はここで、単なる(世界認識の拡張運動のような)連続的な更新ではなく、むしろ非連続性や変化を表す。人をアポリアに陥れる未知なるものが現れ、「既知の世界」の正常性 (*normalité*) を侵犯するという意味で、未知なるものとの関わりの経験はまずもって、共約可能性の限界の経験である。

そのようなアポリアの経験について考えるために、目的をもった行為主体とその反省的な営みという視点から離れる必要がある¹³。共約可能性の限界としての未知なるものとの出遣い¹⁴によって既知の世界の諸々の境界が揺らぐ。そこでは、いかなる予測も不可能になり、人は彷徨うことになる。「彷徨うこと (*ne pas savoir où aller*)」とは既定の「路」(*chemin*) がないこと、目指しうる目的地のない状況の経験と同じことである¹⁵。

このような「彷徨」としてのアポリアは、困惑もしくは迷い(路に迷うこと)という一般的な捉え方と一致しているのみならず、「旅」と「路」の文脈とも関連している。デリダは、アポリアの経験を完結しえない旅であると捉える。さらに、路の通行可能性の有無とはまさに、*hodos* と *poros* というふたつの路の文脈において敷衍することができると思われる。

(2) アポリアにおける路の生成可能性

デリダがアポリアの経験の特徴として強調したのは、その貫通不可能性である。それはつまり、アポリアの経験の旅は、特定の目的地のない、完結し得ない路であるということの意味する。

目的への到達によって規定される hodos の観点から考えると、アポリアはどこにも至らない、「行詰まり」や認識への路を阻む不毛な瞬間である。そして、その hodos の体系から逸脱しているゆえに、アポリアは路の範疇から排除されることになる。

それに対して、すでに示したように、poros は予め開かれた路ではない、到達点のない、ましてや「路が存在しえないところに見出されるところの路」でさえある。だが、それにも関わらず、hodos の体系やその秩序に属さない、それとは異なる別様の路である。そのような「路ならぬ路」としての poros の性格は、デリダのいう「非・路」にみる「迷い」や「彷徨」のような、アポリアに陥るときの状態と密接に関わっているように思われる。未知なるものに直面して、了解を越えた世界に迷い込んだ人は自分の目指す目的地やそこに到達する方法を見失ったとき、方法や法則を越えて独りで決断し、自ら poros を見出し、拓いてみることにしか進展の余地はない。意図せざる帰結へと導かれる可能性も当然あるのだが、その決断なくしては、poros は拓かれない。

そのような状況のなかで、独りで決断を下すことが人を困惑に陥れる。確かに、poros を拓くことは難しいこと、ある意味で大胆なことを求めるが、その過程は「到達」の要件によって規定されることなく、「途中」で未知なるものとの関わりを通じて生成する。Hodos と違って、poros は「目的に至るための路」になりえない。また hodos が体系内の目的と手段を結ぶものであるならば、poros はそのような明確な到達点をもっておらず、そこに辿り着くための明確な手段としての方法も備わっていない。

poros の観点から考えると、アポリアはもはや、認識の行詰まりではなく、むしろ、如何なる道標も存在しないところで、旅の途中で路を新たに創る契機としてみることができよう。つまり、アポリアは路の生成可能性を孕んでいるということであるが、その路はけっして通常の意味で「解決」や「答え」への路として成立しえない。そして、その旅路は完結を迎えることはないだろう。なぜなら、未知なる状況に直面して生じた疑問はどこかに「解答」のある疑問ではないからである。

そのような解答なき疑問は万人に等しく路の通行可能性を保証するわけではない。それゆえ、各自に自ら対応することが求められる疑問である。さらに、既定の到達点がないので、それと「付き合う」ことはできても、解消することはできない（さもないならば、poros の生成運動はただちに、了解に回収され、予測可能な hodos になってしまうだろう）。しかし、その正解のない関係の過程を生き抜くことは、自己変容の旅の重要な要素であると思われる。

(3) 越境する自己変容

どこに辿り着くかわからない路を拓くということは明らかに教育的な有用性の要請から逸脱している。だが、アポリアを己の誤謬を悟り、説明・理解をさらに求めていくための「過渡的段階」であるとみなすならば、アポリアは回避されるが、けっして解消さ

れることはない。アポリアは依然として残る。その上、アポリアをそのように捉えると、それがもたらす自己変容の契機を見逃すことになる。なぜなら、アポリアとは単に「路がない」状態のことではなく、むしろ（教育的意図などによって）予め用意された路がない状態だからである。その状況のもとで、人は確かに困惑を覚える。だが、それはおそらくアポリアから生じるとされる困惑であるより、何らかの方法の適用によって確実に開かれる hodos のなさに対する不安の産物であろう。

要するに、人間が生きていく上で被る変容は、大半は社会のなかで生活している限り、その社会の規範などによって定められた路を歩み、既定された目標へと進み、到達することによってなされる。その意図された諸目的への到達を促すことは、教育の役割であり、働きである。だが、ここまでの論述で明らかにしたように、自己変容のもうひとつの路として、アポリアに直面して、独りで拓かなければならない路もある。このこともまた、人間が社会のなかで生活していることの帰結であると思われる。なぜなら、アポリアは人間の前に立ちはだかる、社会における世界了解の限界であり、それを越境する出来事だからである。こうした見解を提唱するならば、そのような「別途の」自己変容の旅を捉えるために、ひとつの重要な論点を明らかにせねばならないだろう。

それは、poros を拓く際に必要な「既存の法則を越えてなされる決断」について詳述することで、旅の進路を司る「決断」という重要な契機をアポリアの文脈に位置づけることである。通常、個人的な趣味による選択から、倫理的な次元における道徳判断や価値判断に至るまで、人間が決断を下す多くの場面では、決断されるべき諸要件の状況に関して、ある程度の知識や理解があつて、その決断に先行する法則体系がある。決断はここで、事後にその正確さ、もしくは正当性が保証されうるものとなる。

だが、アポリアに直面して、poros を拓くための「決断」は、あらゆる法則を越え、なされなければならない。問題になるのはこの場合、「決断」とは如何なる行為か、そして poros は如何にして創られるかということである。

Ⅲ アポリアの経験における「決断」の意味

(1) 未知なるものへの応答の問題

教育的な場面を含む多くの疑問には目的がある。われわれはよく、疑問に対しては必ず、答えがあり、疑問と答えを対として考える傾向がある。そしてそれはほとんどの場合、妥当な考えである。そのことについて、ここで異論を唱えるつもりはない。それより、次のように問うてみたい。共約可能性の限界が未知なるものとの出遭いによって露呈するとき、了解に回収できないような未知なるものが現れ、その秩序を脅かすのだとすれば、どのようにその状況に対応できるのだろうか。これは度外視できない、大切な問いであるように思われる。

出遭い、そして関係の過程を通じて、未知なるものに応答しなければならない。だが

一方、アポリアのなかで、人が了解の基盤を失ってもなおなされなければならないその決断は不可能な決断である。なぜなら、それは現前し得ないものに対する決断であるがゆえに、その決断もまた、現前しては起こりえないからである。決断によってアポリアは超過され、回収され、解消されることはない。むしろ、出遭いはそれへの応答としての決断に「痕を残す」出来事であろう。

「路」はその度ごとに、未知なるものとの関係において、それに応答することによって、創られていくものである。だが、その路はどこに辿り着くかが予測不可能である。以後に詳述されるように、ここで見出された路は「解決」または「正解」を導き得るようなものにはなりえない。にもかかわらず、人は最終的に、決断不可能性の試練を経て、路を決めなければならない。その過程を通じて、正常性の連続性と秩序が揺らぎ、それとの出遭いによって、人は自己の限界に直面するのである。

(2) 応答可能性と計算可能性

アポリアの状態をこれまでの議論において、「路に迷った・路を失った」状態に例えたことを思い出してもらいたい。そこで迷い人はふたつの問題に直面する。ひとつは、どのようにしてここに至ったかがわからないこと。もうひとつは、次に何をすれば（どこに行けば）いいかがわからないということである。そのときに人は、ここに至るための算法と、他の可能性のなかの自分の位置を相対的に表す全体的な地図の両方を欠いている¹⁶。従って、未知なるものに対して、地図も算法もないまま、別様に応じることが求められるだろう。つまり、それは応答可能性に関わる視点である。デリダは了解を含む世界認識や主体的判断など、哲学の通説における人間の理性的諸活動をいわば「計算可能性の原理 (principe de calculabilité)」に収斂し、その原理では、未知なるものへの応答可能性 (responsabilité) を全うするには不十分であるという¹⁷。さらに、その充分な条件に関して、以下のように述べている。

「おそらく、応答可能性というものに相応する十全な概念は存在しえない、またはあってはならないだろう。応答可能性はそれ自体において、本質的な過剰性 (démésure) を孕んでおりかつ孕まなければならぬ。それは理性の原則にも、何らかの計算式にも規制されていない [...]。私が計算不可能性または決断不可能性について、あれほど頻繁に言及しているのは、単なる遊び心のためでもなければ、決断 (décision) を遮断するためでもない。むしろ、その反対である。即ち、計算不可能性または決断不可能性の試練を経ずして、[...] 応答可能性はありえないと思うからである。さもなければ、ただ計算、計画、因果性、最良の場合「仮言的命令」があるのみであろう」¹⁸。

要するに、決断は未知なるものとの共約不可能な関係のなかで、「決断不可能性の試練」を経てしかなされえないということである。アポリアに陥った当人は途惑い、答えない疑問に直面するだけではない。未知なるものとの出遭いによって、如何にそれに応じるかという問いも生ずる。そこで、応答可能性とは路 (poros) を見出す可能性のこととして解釈できよう。

未だ起こらなかったこと、目にしなかったもの、見知らぬ状況との出遭いは日常性や正常性を侵犯し、その限界、またはその向こうの深淵を露にする。デリダは未知なるものの出現を「到来 (l'arrivant¹⁹)」と呼ぶ。それは、名前 (名称) や同一性を持たないもので、我々の正常性とその秩序のなかに踏み込み、その境界を揺るがすことで、経験を促す。それは到来がもたらす出来事 (événement) であり、そのような経験は未一来 (l'à-venir) の可能性の次元を開く。「未一来」とは到来の特異性も帯びており、「未だ来ていない」予測不可能な未来 (avenir) の出来事のことである。そのゆえに、未だ承認されていない未知なるものとの遭遇の如く、その未来の姿は必然的に怪奇的 (monstrueux²⁰) で、驚きに満ちたもの、ときに恐ろしいものでもある。怪奇的でない未来は未来ではなく、(現在において) 既に予測可能な、計算可能な明日となる²¹。

以上の論述を通じて提起される解釈は計算や計画性を排斥するような視点であるように思われるかもしれないが、決してそうではない。デリダは最終的に決断を遮断するために決断不可能性に触れるのではないということを既に指摘した。それと同様に、計算を排斥せんばかりの計算不可能性ではない。むしろそれは計算できるものとのできないものとの間の関係を再考するように促す提言であろう²²。

本稿の文脈では、それは、第一章で述べたように、hodos と poros との間の関係であると考えられる。すなわち、一方では、計算可能な教育的営為の計画・意図そしてその実践のための方法があり、他方では、計算不可能な未知なるものとの出遭いと、それにともない、人間に迫られる応答の必要性である。そのふたつの次元の間の関係について考えることは、教育的意図としての自己変容 (人間形成) と「別途の」自己変容の路との関係を考えることであり、自己変容という事象をより広く捉えられることを可能にすることだろう。よって、次章において、そのふたつの次元は具体的にどのような関わりをもつかについて詳述する。そして、その関わりに鑑みて、今日においてどのような問題が提起できるかを提示してみたいと思う。

IV 計算可能なものと計算不可能なものとの間の関係を再考する

「痕を残さない」過程を通じて困惑の元凶である異質なものが完全に払拭されて、さらなる豊かな世界観に加わるような経験形態はおそらく、今日の教育にとって最も望ましい形の経験であろう。共約不可能なものは教育 (学) の計画を狂わせ、その営みを困難にするだけでなく、山下恒男が指摘するように「いまの子どもや若者には、不確定

なものに対する恐れ、忌避がある〔…〕。こうした感性ももちろん学習されたもの、あるいは学習されなかったことの結果といえることができる²³。今日の社会変貌は生活の時間的・空間的な画定を要請し、それとは異質なものは混乱・摩擦・危険の要因とみなされ、慎重に避けられ、排除されてきた。日本社会はいわば「無菌状態」（山下曰く）に達した。過剰な計画性によって、共約不可能なものがなくなるとき、それとの境界について考える必要性もなくなる。だが、皮肉にも、共約不可能なものを遠く閉ざしたら、思考が尖鋭化するどころか、思考の「倦怠」という別の脅威がまた現れるのではないか。

今日の子どもは、驚きや感動の経験が乏しくなった、と近年しばしば指摘される。しかし、驚きや感動などは、特定のどこか、または特定の何かに一般的に、規則的に潜んでいるのではあるまい。よって、「驚く方法」、驚きへと確実に導く hodos を特定し、それを教育的意図でもって得られるとすれば、それはむしろ、「驚き」の終焉の宣言となるろう。

また、異常だ、逸脱だ、問題だという以前に、「これは何か」という驚愕・疑問がある。そして、それに次ぐもうひとつの疑問、つまり「如何に応じるか」という疑問には、先に触れた「計算可能性の原理」に導かれた「了解」という答えの他に、別の応答可能性がある。

例えば、驚きの根源はどこにあるかということを考えてみれば、それはおそらく特定の事象においてではなく、予測し得ないものの出現において見出されるといえるのではないか。そして「それは何か」という疑問はこの文脈では、どこかに答えやその答えを見出す方法があって、それを実行しさえすれば、この疑問が消えるというものではない。疑問と答えが一对になる以前に、用意された既定の「答え」がないゆえの疑問がある。

未知なるものの出現は「既知の世界」の境界を侵犯し、曖昧にするのだが、その侵犯以前の秩序を回復すべきであるとの前提に立てば、それは問題となる。さらにその異常を正常性の内に収めるべきであるとの前提に立てば、その疑問への答えが必要になってくる。とりわけ、今日の教育（学）はこうした諸前提の上で成り立っている。

ところが、「それは何か」への正当な答えや問い方（「問題」としての立て方）は教育でもって教えられるが、「それは何か」を問うことそれ自体は教えられないのではないか²⁴。

子どもの驚く様子を考えてみれば、ここではそれに対する説明が求められているのでなければ、答えさえ求められていない場合もあるといえよう。そのような疑問を促すのは教育的な営みではなく、特定化を逃れ、予測をも免れる未知なるものとの出遭いである。

さらに、そのような経験が促すもうひとつの問いがある。未知なるものと出遭い、その「怪奇性」に触れることによって、「それは何か」を問うことになるが、未知なるものとの関係の過程を通じてもうひとつの問いが生じる。それは「如何に応じるか」、つま

りその異質性への応答に関わる問いである。だが、先に指摘したように、その応答は予測不可能性という状況下でなされなければならないゆえに、決して「如何に応じればいいのか」という問題と同様のことではない。如何なる特定化をも逃れ、如何なる計算や予測をも免れる未知なるものの出現は応答・決断を迫る。そして、その出現とともに立ちだかる曖昧な境界において、あらゆる既定の規則を越えて関わるのが人間に変容をもたらす。

このような経験は人間にとって、教育的な「意図」や「目的」をもたないが、もうひとつの「自己変容」であると考えられる。なぜなら未知なるものと遭遇しては路に迷い、そしてその過程を通じて、人は「それは何か」という問いと「如何に応じるか」という問いを考えることになるからである。さらに、未知なるものとの接触は人類が長年、豊かな文化的変容を醸してきた土壌でもある。

探検者、加えていえば学者も、はじめに追求していたものより新奇で、意外なものを見つけてしまうことがある²⁵。それらの発見がもたらす変容はときとして凄まじいものであったが、彼らが「路に迷った」からもたらされたであろう。また、外界との関係、外界からの進入、外界に向かっての旅はかつて、ただ世界認識の拡大だけではなく、新たな世界創造をもたらした。その経験が残した痕跡は、我々の知識にも、規範にも、世界観にも潜んでいる。現代の世界観を支えている諸々の発想・発見をした学者、思想家は今となっては、「人類発展の偉大な貢献者」として挙げられているが、それらの出来事には汲み尽くせない異質性が残る。例えば、ガリレオ (Galileo Galilei) は地動説によって、またダーウィン (Charles R. Darwin) は進化論によって、当時の社会規範や知識体系をいわば「侵犯」した人物であったことを想起すれば理解しやすいだろう。

より一般的な観点からみても、自己変容はある目的まで路を正しく進むことでのみ生じるわけではない。人間はアポリアの経験を通じて、未知なる世界の共約不可能性に直面することによって、「別途の」変容可能性、つまり「越境する自己変容」の運動に開かれている。それは確かに、教育的な意味での成長や発達とはいえないかもしれない。だが、変貌の絶えない、複雑に膨張し続ける今日の社会的関係においては、新奇で未知なるものと遭遇する可能性はますます高くなりつつある²⁶。人生を旅に例えるならば、その旅人である人間には、路に迷わないための技法はもちろんのこと、迷ったときの心構えも必要である。人が迷った際に、独りで考え、決断し、新たな路を拓くことは、古くから旅を生き抜くのに大切なことでもあり、旅がもたらす自己変容の契機でもある。

今日の社会状況を窺うと、その主要な問題として、社会生活の様々な領域の「希薄化」が嘆かれている。本稿の議論の視点からすれば、近年問題視される人間関係や自然との接触の「希薄化」とは、未知なるものとの出遭いの希薄化に他ならない。野外観察や野外活動の類がよく「体験」の名を冠せられるこの頃であるが、みるべき箇所やなすべき活動が既定のものである以上、参加者が「出遭う」可能性はむしろ忌避されている。さ

らに、山下が指摘したように、この忌避によって「不確定なもの」が被る拒絶も視野に入れる必要がある。子どもや大人の別を問わず、目標や要求が何であれ、最も確実に、安易で、はやく達すべきことは我々の社会の最たる特徴であろう。現代社会の変貌とともに、根強い「出遭いを拒む傾向」も育まれてきたのではないだろうか。その傾向に潜む諸問題を改めて問い直す必要があるように思われる。

V 結語に代えて

アポリアは教育にとって厄介なものであることは確かである。しかし、以上に示したように、アポリアは認識の「過渡的段階」でもなければ、世界了解やそれを促す教育の内部の誤謬でもない。自己変容の旅には、様々な路がある。本稿で取り上げたように、hodos は誰もが通れる明確な既存の路であるのに対して、poros は予め存在し（え）ない、各自が自ら創らなければならない路である。そのふたつの路は背反し、対立するものではない。むしろ自己変容のふたつの重要な契機である。

本稿はアポリアが孕んでいる poros の生成可能性を「越境の運動」として捉えた。それは、教育的意図を越えた迷い人の既知の世界や理解図式を揺さぶっては開放する原動力であると考えられる。答えのない疑問としてのアポリアに陥った人間は自己と世界との関係を問い直し、越境する自己変容によって世界と交わる新たな路を自ら拓くかもしれない。

〔参考文献〕

- Burbules, Nicholas C., "Aporias, Webs and Passages: Doubt as an Opportunity to Learn", *Curriculum Inquiry*, Vol. 30, No. 2 (2000), pp. 171-187.
- Derrida, Jacques, *Points de suspension*, Galilée (1992).
- Derrida, Jacques, *Force de loi: Le «Fondement mystique de l'autorité»*, Galilée (1994).
- Derrida, Jacques, *Aporias*, Galilée (1996).
- Gasché, Rodolphe, "L'expérience aporétique aux origines de la pensée. Platon, Heidegger, Derrida", *Etudes Françaises*, Vol. 38, No. 1-2 (2002), pp. 103-121.
- Kofman, Sarah, *Comment s'en sortir?*, Galilée (1983).
- Liddell, Henry G. & Scott, Robert (Ed.), *Greek-English Lexicon New Edition*, Oxford, Clarendon Press (1996).
- 佐藤康邦・溝口宏平編、『モラル・アポリア：道徳のディレンマ』、ナカニシヤ出版（一九九八年）。
- 納富信留著、『プラトン 哲学者とは何か』、NHK出版（二〇〇二年）。
- 山下恒男著、『子どもという不安 — 情報社会の「リアル」—』、現代書館（一九九三年）。
- 湯浅博雄著、『バタイユ：消尽』、講談社（一九九七年）。

〔注〕

1. 詳細については、倫理的アポリアを概観した佐藤康邦・溝口宏平編、『モラル・アポリア：道徳のディレンマ』、ナカニシヤ出版（一九九八年）を参照。
2. 納富信留著、『プラトン 哲学者とは何か』、NHK 出版（二〇〇二年）を参照。アポリアの場面として『メノン』（80A および84A）が挙げられる。『プラトン全集 9』所収、藤沢令夫訳、岩波書店（一九七四年）。
3. Burbules, Nicholas C., “Aporias, Webs and Passages: Doubt as an Opportunity to Learn”, *Curriculum Inquiry*, Vol. 30, No. 2 (2000), pp. 172, 182.
4. Liddell, Henry G. & Scott, Robert (Ed.), *Greek-English Lexicon New Edition*, Oxford, Clarendon Press (1996), under “ἀπορος”.
5. Kofman, Sarah, *Comment s'en sortir?*, Galilée (1983), p. 18.
6. Liddell & Scott (1996), under “ὁδός”.
7. Liddell & Scott (1996), under “πόρος”.
8. Kofman (1983), p. 17.
9. Kofman (1983), p. 18. 著者のいう「意味論的な豊かな文脈」に関する記述は示唆に富んでおり、興味深いものであるが、本稿では詳述を控える。ここでは、他の論者（Gasché (2002) と Burbules (2000)）が挙げられる。文末の参考文献を参照）にも積極的に援用された poros という言葉自体の捉え方に焦点を当てることにしたい。
10. Derrida, Jacques, *Force de loi: Le “Fondement mystique de l'autorité”*, Galilée (1994), p. 37. なお、「貫通すること」および「非・路」は『法の力』の邦訳版（堅田研一訳（一九九八年）、法政大学出版局）ではなく、筆者による訳である。
11. Derrida (1994), p. 37.
12. non-chemin の non- という接頭語はあるものの不在や否定を意味するために使用されるのが一般的である。しかし、non-chemin はここで、その意味では捉えられないと考える。似た用語法で、バタイユ（Georges Bataille）の思想における non-savoir は邦文では「非・知」と訳される。その解釈に倣って、デリダの non-chemin を「非・路」と捉える。非・知とは知の欠如や無知のことではない。むしろ、バタイユは「それ自身として存在することなく、常に「自己」から外れ、ずれ動く」ような知、また「無限に終わることなく自らを消しては書き直す運動に投入されること」を非・知と呼んでいる（湯浅博雄著、『バタイユ：消尽』、講談社（一九九七年）、三五七頁）。そのような終着点のなさや逸脱の様相はデリダの非・路にもあると考えられる。
13. 経験は一般的に、主体の働きかけと対象の反応との間の因果関係の了解であるとされる。だがここでは「未知の世界の探究者」たる主体的な観点より、むしろ「未知の世界との遭遇」の観点から経験を考察する。つまり、一般的には主体は自分の働きかけに対する対象からの反応の観察者であるが、ここでは経験の発端は自分の働きかけではないがゆえに、それは当てはまらない。
14. 未知なるものとの関係の発端は本人にとって望まれた、予測された、また計画された接触ではないので、その「遭遇」の性格を表すために、「出遭い」と表記することにしたい。
15. Derrida, Jacques, *Aporias*, Galilée (1996), p. 31.
16. Burbules, (2000), p. 173を参照。
17. Derrida, Jacques, *Points de suspension*, Galilée (1992), p. 287.
18. Derrida (1992), p. 287.
19. 誤解を避けるために、到来 (l'arrivant) を敢えて「到来者」と訳さない。それが具体的で特定の

- 「到来する誰かまたは何か (quelqu'un ou quelque chose qui arrive)」ではないからである。Derrida (1996), p. 66.
20. ここで「怪奇的」という表現は、一般的にいう「怪物」の特別な意味において使われる。「怪物 (monstre)」とは名がなく、単に現れる (se montrer) ものだ。まだ現れたことのないものが現れ、その姿を特定するために、如何なる予測もされなかった。それゆえに恐ろしくみえるのである。
21. Derrida (1992), p. 400.
22. Derrida (1994), p. 62.
23. 山下恒男著、『子どもという不安 — 情報社会の「リアル」』、現代書館 (一九九三年)、八一～八二頁。
24. この点について、Burbules (2000), p. 184も参照。教育という営みにおいて、典型的な問いの形式は、答えが予め教師などに知られているのであり、答えを導くがための問いである、という。
25. 未踏地域の探検はもちろん、革新的な学術的発見や論説はしばしば、通常の方法論からの逸脱や迷いの産物である。例えば、フレミング (Sir Alexander Fleming) による抗生物質の発見 (一九二八年) は、もともと異種菌による培地感染事故、つまり通常では培養実験の「行詰まり」を宣言する出来事の「お陰で」なされたことが挙げられる。
26. 今日の間関係の社会的構造が複雑化したということに留まらない。自分の日常の生活圏とはかけ離れた未知なる遠地やその住人の生活や文化との接触の頻度は情報通信や交通網の急激な発展により増加した、ということである。